発掘ニュース65

栢ノ杜遺跡

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

三重塔跡の基壇の高まり（南から）　今回の調査

基壇の周囲に散乱する大量の瓦（北から）　今回の調査

八角円堂跡と方形堂跡（西から）　1973年の調査

はじめに　2003年の冬、醍醐栢ノ杜遺跡で発掘調査が行なわれ、その所在が長く不明であった三重塔跡が確認されました。

栢ノ杜遺跡は、今から約850年前、平安時代の終わり頃に建てられた醍醐寺の子院跡です。当地は、醍醐寺から南へ約1km離れた笠取山の西麓で、西側に視界の開けた標高50m前後の高台に位置します。

この地が子院跡であることが判明したのは今から30年ほど前のことです。宅地造成が計画され、発掘調査が実施されました。その結果、2つの建物跡が南北に並んで確認されました。北側の建物は八角円堂（径14.3m）、南側の建物が方形堂（一辺22.5m）で、八角円堂の西側には庭園跡も見つかっています。

文献から　平安時代の終わりに成立した『醍醐雑事記』には、栢ノ杜遺跡を示す栢杜大蔵卿堂が久寿二年（1155）に供養されたことが記されています。「大蔵卿堂八角二階　九躰丈六堂　三重塔一基各檜皮葺」「願主大蔵卿正四位源師行」とあり、ここには3棟の建物が存在し、本願は大蔵卿を務めた源師行であったことがわかります。

鎌倉時代、東大寺を再興した俊乗坊重源の事蹟を著した『南無阿弥陀仏作善集』には、重源が栢杜堂に堂一宇と丈六の阿弥陀如来像

を９躰、金色の３尺立像などを造り安置したことが記されています。

調査の経緯　1973年の調査を指導された杉山信三博士は、確認した建物のうち、八角形の建物跡を八角二階の大蔵卿堂であり、方形の建物跡を九躰丈六堂と比定されました。

これは、重源が建久三年（1192）に造営した兵庫県小野市に現存する浄土寺浄土堂と、規模や柱位置が全く同じであるためです。また、重源によって中国から持ち込まれた「大仏様」と呼ばれる新しい建築様式の部材が出土したことにもよります。

このようにして、『醍醐雑事記』に記された２つの建物の位置が明らかとなったのですが、三重塔の位置は不明のままでした。そこで京都市文化財保護課は、その位置を明らかにするため、30年ぶりの発掘調査を史跡指定地周辺で３箇年計画で行なうこととしました。

発掘調査は2001年から2003年まで毎年冬の約２箇月間行ない、２年目には、方形堂の南約30mの場所に、塔の位置をほぼ推定することができました。最終年には、その地点を拡張して調査を行ない、遂に塔の位置と規模が明らかになりました。

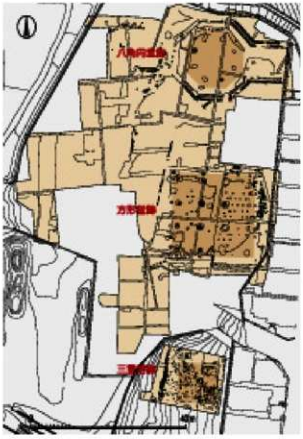
まとめ　見つかった塔跡は、礎石などはすでに失われていましたが、方形の基壇が検出されました。基壇の規模は一辺10.6m、高さは0.6mとやや低く、亀腹基壇と呼ばれる型式です。基壇の周囲からは、屋根に葺かれていた大量の瓦が出土し、瓦とともに鋳鉄製の風鐸も出土しました。

風鐸は屋根の四隅に吊す装飾具ですが、この時代には塔にしか吊されることはなく、この遺物が塔であることの決め手となりました。

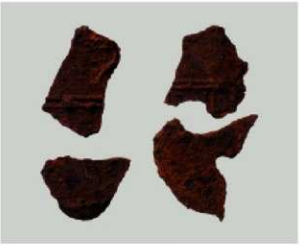
また、出土した瓦には、嘉禎二年（1237）に九条道家によって造立発願された東福寺から出土する瓦と同じものが多くみられます。『醍醐雑事記』には三重塔は檜皮葺とありますから、鎌倉時代になって瓦屋根に葺き替えられたものと考えられます。

調査開始から30年を経て、栢ノ杜遺跡の全容はほぼ明らかになりました。

栢ノ杜遺跡は、重源という著名な僧が、その造営に係わったことも遺跡を考える上で重要な点ですが、文献史料と発掘調査の成果が見事に合致した稀な例です。機会があれば現地を訪ねてみてください。　（南　孝雄）



調査でわかった建物の配置


鋳鉄製の風鐸と風招の破片

三重塔跡出土の軒平瓦